

福田彩乃さん インタビュー



「明日が見えない」怖さ

「福田さんは芸能界へのいわゆる転職組になりますよね。」

「芸能界に入る直前はOLをやっていた。でもリーマンショックによる不況でいわゆる『派遣切り』に遭いました。その後の就職活動中に、たまたま見つけた今の所属事務所のオーディションを受けたことになったんです」

「高校を卒業してすぐはスーパーの精肉店で働いて鶏の解体法を学び、エステティシヤンの仕事も少しやりました。もう少し違う仕事をしたいと思っていたときに、ハローワークで見つけたのが自動車会社での派遣OLの仕事でした」

「仕事内容は主に調達業務で、メーカーさんに電話して部品納期を決めるとか、デスクワークをしました。リストラされるまで1年くらいそこで働きました」

「3万人を超える応募があったオーディションを勝ち残って芸能界に入ったんですね。」

「友達に、受けてみたら、と勧められて、最初は何も考えずに参加してしました。だけどオーディションの審査を通過するにつれて、周りの人たちの姿に刺激され、自分ももっと頑張らなきゃと思うようになったんです」

「オーディションには部門が3つありました。役者とアーティストとバラエティ。オーディションを見つけたのがたまたま締め切り当日で、アーティスト部門はデモテープが送れず。役者部門は19歳までと年齢制限があり、当時20歳だったので受けることができませんでした。バラエティ部門は年齢問わずだれでもOK。これしかなかったたのでバラエティを受けました」

「その時のオーディションが、特技披露か、1分間面白い話をするかだったんです。1分間面白い話といってもどんな話をしたいのか。ネタも持っていないし、スベらない話も持っていない。特技もないなあ。結局、最初のオーディションでは、OLをしていた時の上司のモノマネや動物のモノマネ、友近さんがやるキャサリンのモノマネをしました。マネのマネだし、クオリティもなく、完全な身内ネタです(笑)」

「その時の審査員の反応は。『左端の人が厳しかったです(笑)』。その人が後に最初のマネジャーさんになった方でしたが、初対面でいきなり『やせない』と言われて腹が立ち、翌日からジムに通ったことをいまでも覚えています」

「オーディションは4次まであって、1次は書類選考、2次は地区予選、3次は千葉県で合宿、そして最終審査は両国国技館で全国から選ばれた13人でやりました」

「芸能界に入ってから苦労は。『明日が見えないのが怖いんです。でも不思議なんです。明日仕事がないかもしれないと分かって、みんな将来の目標を立ててそこに向かって仕事をしてくんです。矛盾してますよね』

「この仕事で成功するか失敗するか、いつも紙一重のところに自分はいらんだなって思います。今はお仕事を毎日いただけにいるからこそ、明日急になくなっ



「こなす」というのがすごく嫌いなんです

たらしようという危機感は常に持つようにしています」

「なので1日、もしくは半日だけ休みがあってもやっぱり落ち着きません。何かしなきゃいけない、何かしてなきゃ、とか。気持ちだけが先走ってしまします」

「気は抜けないですね。」

「実は、モノマネも、正直もうできない、って思った時期があったんです。新ネタを視聴者や、スタッフさんから求められることに自分の実力が追いついてない実感して。モノマネをする時のワイドの引き出しのなさ。ネタに目新しいさを求められるようになって、とにかくその場を乗り切ることで満足していた自分がいたかもしれません」

「成長できてない自分に、これでいいのかなと思うことは何度もあります。もっと違うもの、新しいものをみせたい、ほかの人とは違う切り口で面白さを生み出したいと思っていますし。だから一時期、自分の気持ちが停滞してしまった時があつて。だけどそんな自分とは無関係に時代は流れていて、仕事をすれば求められるし、そのとき期待にこたえなければいけないのも私たちの仕事で、その時はやるんですけど」

「そういう葛藤もありながら、自分が選んだ仕事だし、焦っちゃいけないけど、でも焦らなきゃいけないという、このバランスのとり方が難しい。ここ半年から1年くらい、そういうのを感じるようになりました」

「OLの時の経験が役に立っていることはありますか？」

「人間関係だったり、人とのコミュニケーションのとり方だったり、高校を卒業してから精肉店で働いたときに学べた気がします。お酒の席での振る舞いなどもそうです。同年代の人たちで、知らない人もいます。知っている自分はOL時代の経験があるからなのかなと」

「でも、社会人経験の中で、こういうことを教えてくれる、気づかせてくれる人がいた。環境にも恵まれていたからなんです。大人はこういうふうに見るんだ、メニューはこういう時に見るんだ、あれぐら飲み物が減ったら『次何か飲みますか』って聞くんだ、とか全部教えてもらいました」

「そう簡単にはできるようにはなりませんよね。」

「そういう気遣いができるかできないか、それで人からの見られ方って変わると思うんです。ほんとささいなこと、小さなことなんですけど、媚を売るのはまた違うんですよ、それは」

「まだまだ私も飲みながら目をキョロキョロさせて周りを見なきゃいけないなと思います。でも今までのような人に恵まれた環境がなかったら、私はたぶん分からなかったことなんですよね」

「仕事をやる時に大切にしていることは？」

「まだだれも私のことを知らなくて、これからというときは、とにかく頂いたお仕事を一生懸命やること、というの

がひとつテーマでした。今ももちろんそのテーマは変わらないのですが、私は『こなす』というのがすごく嫌いなんです。番組に出てくるだけ、映ってるだけっていうのが、自分がそうになってしまった時期もあったからこそ、その後にくる傷みが辛かったです」

「やっぱり番組に出て何かを残して、見た人が『昨日の番組でさあ、福田彩乃がさあ』と言って、ちよつとでも話題になってくれたらいいなあって思います。いま、時代の流れが速く感じるからこそ明日になったらどうなってるかわからないんです。だから常に自分の中で意識しているのは、どれだけ自分のことを俯瞰できるか、客観視できるか、っていうところです」

「客観視、ですか。『なぜ自分がこの番組に呼ばれたのか。この番組なら自分はどの立ち位置でいるべきか。そう考えるのは当たり前のことかもしれませんが、それが分かっていない時もありました』

「こーい、2年でバラエティ、役者業、声優、というんなお仕事をやらせていたいたので、今はもう一度、あらためて自分がどうあるべきか、というのを考えながら仕事に取り組みたいと思っています。モノマネでも、ネタがなくなっただけで居をやっていると思われないように、ネタも作り続けながら『あつ、役者もできるんだ』というところをみせたい」



今日の非常識は明日の常識――

今の自分にぴったたり

「気分転換はどうしてますか？」

「今は絵を描くことが好きです。一心不乱になつて『無』になっている感じが自分らしくもあります。仕事とプライベートの両立が難しいからこそ、そういう時間は大切にしたいと思っています」

「役者でもあり画家でもある片岡鶴太郎さんはモノマネやバラエティもされています。表現者としてとてもユーモアがあつて多才な方ですよ。そんな鶴太郎さんとお食事をさせていただいた時に『いつか一緒に個展ができたらいね』とおっしゃって下さいました。それがすごくうれしくて。表現者としてあるべき姿は十人十色なんだと、こうやってまたひとつ、違う分野で新しい目標ができました」

「ほかには。『お酒なんかも：気分転換になりすぎちゃってぐらいい。ちよつと控えなきゃ(笑)』

「これから芸能界をどうやって歩んでいきますか？」

「『日清食品の創業者の安藤百福さんが名言を残されています。今日の非常識は明日の常識。まさに今の自分にぴったりの言葉だ』

「モノマネだけやればいいのに、女優なんてやらなければいいのに、いろんなことを思われても、その期待を裏切つてやるう、っていうのが今の私の中にはあります。今は私に対して疑問を感じる方もいるかもしれないけれど、ゆくゆくは『福田彩乃って今までのいなかっただ人だよ』っていう風に言われたいです。人と一緒にだつたらいいから、このお仕事は。だから人と違うところをどんなにマニアックになつていききたいです(笑)」

「とても前向きで貪欲ですね。『私が所属しているアミューズという事務所は、バラエティは私一人だけなんです。それで、最初は事務所内でも否定的な見方をしている方はいました。『バラエティでできるの？どうせできないでしょ？』みたいな。だからこそ、自分で道を作つて、そこに足跡をしっかりとつけていきたい。いい意味で人を裏切つていきたいです』

「その強い気持ちはどこで培われたのでしょうか。『最初アミューズに入ったとき悔しかったんですよ。だれも自分のことを見なくて。先輩も後輩もない、だれにも相談できない。だけど、右も左も分からぬまま『自分でやりなさい』って言われて」

「そんな中、今のマネジャーさんは私と向き合ってくれました。今まで二人三脚でつく上げてきた道です。だからずっとブレずにこの道はつくり続けていく所存でございます(笑)」